

妊娠してつわりがたいへんだという話を聞く。多くの場合、おさまる時期を待っているだけのようだ。鍼灸治療を受けたり、漢方薬を飲んだりすれば良いと思うのだが、世間の常識をそうっていない。つわりの時に使われる漢方薬で小半夏加茯苓湯(しょうはんげかぶくりょうとう)がある。

軽いものは小半夏加茯苓湯というのを使います。半夏六・〇、茯苓五・〇に陳生姜一節(六・〇)を薄く切ったものを加えて、水三〇〇ccで煎じて約半量になったところでカスを去り、冷たいのを、少しずつ飲みます。少しずつ、しばしば飲むことが、そのコツで、一日にたくさん飲んではいけません。

(荒木正胤著『漢方養生談』)

半夏加茯苓湯は半夏、茯苓、生姜の三種の生薬からなる。古方漢方的にこの薬方からつわりの人のからだをイメージすると、胸の奥、食道下部～胃袋内外に水毒(痰飲)があって、その毒性が妊娠というからだの変動によって悪化している状態である。小半夏加茯苓湯はその水毒の毒性を収めることで、吐き気をなくしてくれるわけだ。

この薬方はつわり専門ではない。車酔いなど、同じ様なからだの状態では吐き気を催すならば使うことができる。逆に吐き気があっても、別なからだの状態ならば、別の薬方となる。

『漢方養生談』にある飲み方は、当に吐き気がある状態での飲み方が書いてある。車酔いの予防ならば、乗車前に温かいものを半量飲んで、乗車中に時々少量飲むようにしたらいいだろう。

さて、ここでは小半夏加茯苓湯を紹介するのが目的ではなく、病のメカニズムの東洋医

学的な見方の説明する例として取り上げた。

妊娠してつわりがひどい人もいれば、軽い人もいる。車に乗って、酔う人もいれば、酔わない人もいる。それは何故か。食道下部～胃袋内外に水毒(痰飲)を持っている体質であるかどうかによるわけである。水毒がそこにあるという事は、そこに滞りがあって働きが低下しているということである。普段の生活には支障になっていないが、妊娠というからだの変動や、乗車での揺れによって起される変動が水毒の毒性を悪化させる。変動はこうした場合によるだけでなく、精神的なストレスによる場合もあるし、カゼによる場合もある。



吐き気は食道下部～胃袋内外の水毒が変動を受けてなるわけであるから、変動をなくすことによって、吐き気をなくす事ができる。妊娠の場合にはその生命の働きを止めるわけにはいかないが、車酔いの場合には可能である。運転手は車酔いにはならない。運転手はその揺れの主体で

あるからで、そこには水毒の毒性を悪化させる変動は起こらないからだ。酔い易い人は、揺れの客体に収まっていないで、当に自分が運転しているイメージをからだに持つといい。

鍼灸ではその水毒があり滞っている食道下部～胃袋にかけての部分の滞りをなくすよう治療する。手首の掌面中間を指三本程入ったところには、内関という嘔気の特効穴がある。そこを通る経絡は胸の中間に通じている。私は通常、内関に関わらず、もっとも反応しているツボを、この経絡上を肘までで探し、使っている。そして水毒がある部分の背側を緩める鍼や灸をする。

(2007年3月啓塾)